

MCC雑感2007-6

於丸紅本社ビル 一階個室コンチェルト

出席： 13名



現在のメンバー18名、DVD-Romをパソコンに付けているのは16名、DVD-R/RWが有る人は11人も居られるのですが、何故かこのテーマは今まで不問に付されて来ました。

何故か？

DVDにとりわけニーズが無い、DVDの扱いが難しい、失敗が多くて触り難い等々・・・敬遠されて来たテーマだったのでしょう。

1—私にとってのDVDとは

DVDというのはどうしてこうも難しいのか！？

私にとっては頗るつきの苦手アイテムです。

パソコンを始めたウィンドウズ95の頃は、光学ベイについては、CD-ROMこそありましたが、DVD-Romは1996年11月に初めて登場したものの、パソコンに搭載されたのは二号機の98になって、コンボと名乗ってCDとDVD両方が読む事は出来るようになりましたが、書き込みは始めから諦めて

いました。

三号機のXPの時（2002年）も私はまだまだ慎重で、二つのベイを取り付けて、DVDはROMだけとし、書き込みについてはCD-Rを採用したのです。何故か？ DVDの規格が統一されておらず、どのような書き込み形式がデファクト・スタンダードになるのかが明らかではないと思ったからです。

実際問題としてDVDに採って置きたいほどパソコンにはデータがありませんし、ハードディスク内のデータ・バックアップのメディアとしてはCDで十分事足りたのです。

しかしながら、流石に21世紀になると、どれでも読むだけならOKという所謂スーパーマルチとなっていたので、その点は楽になりました。

つまり5年前には、私にとってはDVDというのは出来合いの映画や他の人のデータを見るだけのもので、自分で書き込む、保存するというメディアではなかったのです。

私にDVDの書き込みがパソコンで可能になったのは、2007年VISTAになってからのことでもあります。

ところがDVDレコーダーの導入という思わぬ異変が私のITライフに生じました。

最初はマニア在住の息子の頼みで、2006年末ソニー製のステーション・フリーを備え付けたことがきっかけとなりました。

この装置は我が家のテレビを親機として、マニラでもインターネットを通して、日本と同じ番組を観ることが出来るという、私には到底理解出来ない代物でした。そして、このために我が家のテレビがデジタル対応になっていないので、デジタル・チューナー内蔵のDVDレコーダーを息子買って来てくつつけたのです。つまり私には関係なく私の書斎のアナログテレビがデジタル化してしまっただけです。（因みにフリーステーションはソニー製で合法的商品です）

更に次の課題が生じました。

NHKが今年の4月になって、突然アナログのハイビジョン放送は7月末で終わり、それ以後はデジタル・ハイビジョンのみとすると発表したのです。

今度は居間のテレビもデジタル対応が必要となり、10年生の居間のテレビはまだまだ健在なので、こちらにもDVDレコーダーを付ける事によりデジタル化が図られることとなりました。

こうして、我が家にはそれまではVHSのテープレコーダーが2台ありましたが、突然最新鋭のシャープDVDレコーダーが2台出現してしまっただけでした。

DVDはこうしていわば副産物として登場し、そうなる私のツタヤ通いも足繁くなるばかりか、テレビ番組の録画にまで手を伸ばすという効果が生まれました。

私の場合は明らかにDVDはパソコンではなく、家電品として私のITライフに組み込まれたのです。

機種としてシャープを選んだのは、単純に一番安いという理由だけでした。機能や使い勝手など問題にもしなかったのは、あまり当初から録画を意図しなかったからであって、録画は副次的なオマケだったのです！！

ところが、これに触ってみて、私は正直に驚嘆・感激しました。

時恰もニューヨークMETのオペラが世界のテレビ局に配信されたり、テレビ囲碁アジア選手権が日本で開催されたり、見逃せない番組が沢山あることに気がついたという次第です。

長生きしたばかりに味わえる法悦というしかありません。



今や一世を風靡する歌姫アンナ・ネトレプコもハイビジョンの画面と音質で我が家のITライフに華やかな彩りを添えるに至ったのです。

2—DVDとは何か

DVDはデジタルデータの記録媒体である光ディスクの一種。形状やデータの記録・読み取り方式はCD（コンパクトディスク）とほぼ同じだが、記録容量

ははるかに大きく、CDでは不可能だった長時間映像の記録ができることが特徴である。従来のビデオテープに代わって映像記録の主要メディアになっており、映画を始めとしたさまざまな映像ソフトが市販されている。

因みにCDは容量700MB、DVDは4.7GBおよそ7倍である。

DVDはDigital Video Discではなく、Digital Versatile Disc（デジタル ヴァーサタイル ディスク、Versatile=多用途の）が正式名称です。

2枚の0.6mm厚、直径12cmのポリカーボネート製の円板を貼り合わせたもので、CDと同サイズを維持しつつ映像などの大量のデジタル情報を記録でき強度も確保している。読み取りには650nmの赤色レーザーを使用。

パソコンの記録媒体としても使用されDVD-ROMドライブは、CDの再生にも対応する。

ディスクの記録面上に連続線上にピットと呼ばれるくぼみを作ることでデータを記録する。レーザー光線を当て、そのくぼみの有無による反射の違いを利用して、デジタルデータとして読み込む。

3-DVDの種類

VTRに於いてVHSとベータマックスが覇権を争ったことは記憶に新しいが、このようなユーザー不在のメーカー間の争いはDVDでも生じており、折角1996年スタート時点でフォーラムが結成されたのに、直ぐにソニーを中心とするアライアンスが生れて、これが+R/RWを生んでいます。

また次世代DVDではソニーは大勢派のBlu-ray DVDですが、東芝、NECなどがHD DVDを主張しており、このような規格の不統一が我々を悩ませるわけです。

A) DVD-ROM

文字通り読むだけのもの、販売・レンタルされているなどは、作成時に記録媒体にデータを直接記録して作成されているのではなく、データ記録面に読み取り用のビット（窪み）を形成したマスター原盤を作成後、それを元にしたプレスと張り合わせの工程で量産される。幸い見るだけならDVDはスーパーマルチの登場で2002年以降規格の不統一に悩まなくて済むようになりました。

B) フォーラム制定の正式規格—書き込み可能型

i) 追記型DVD-R

記録面皮膜材料に有機色素材料を使用し、レーザー光線照射による色素の分解という科学変化を利用してディスクにビットを焼きつけることで記録が行なわれる。

従って安価に記録出来るが、一度しか記録が出来ず、変更は出来ない。

ライトワンス型と云われる所以であるが、尤も互換性が高く90%とも云われる。但し古いプレーヤーとか、相性問題などで再生出来ないこともあるのが、DVDの面倒な問題点である。

2) 繰り返し記録型DVD-RW

パイオニアが開発した DVD Re-recordable Disc の通称。

DVD ReWritable Disc ではない。

有機色素でなく金属材料を記録面に使い、レーザー光線照射による加熱での金属材料の結晶化による反射率の変化を使う。

従って結晶を再び溶かし、冷却することにより非結晶化することで、繰り返し書き換え可能となる。

3) 繰り返し記録形DVD-RAM

松下電機が開発した Digital Versatile Disc Random Access Memory の略称。

データ記録には優れている外ランダムアクセスが可能であり、専用書き込みソフトが不要のため、PC世界では徐々に普及しているが、構造上の特性からDVD-videoとの互換性が無いので、再生できないプレーヤーが多かった。

C) アライアンス制定の別企画DVD+R/RW

ソニー、フィリップス、ヒューレット・パッカートの3社が提唱した、アライアンスのもので、正式にはDVDのロゴは使えず、+R/+RWとされる。海外でのシェアは大きかったが、日本ではマイナーである。

ソニーの「スゴ禄」松下の「DIGA」で対応するものが現れ、パソコンのスーパーマルチドライブでDVD-Rと全く同じように記録出来るようになった。

4 一家電品・DVDレコーダーの大進化

パソコン世界でハードディスクの大容量化と生産コストの下落により、家電品のDVDレコーダーに革命が起きました。

DVDレコーダーは一旦ハードディスクに予約・保存出来る形で操作は非常に簡単になり、編集、削除なども容易になったのです。

私にとっては副次的であった、テレビの録画は古のVTRの復活として、急速に目覚めましたが、NHKハイビジョンの鮮明な画質や素晴らしい音響も花を添えた形でした。

MCCでは広田さんがソニーの「すご緑」田中勇介さんが松下の「DIGA」を持って居られるのみで、この面では未だしの感があります。

副島さんがNECのパソコンにテレビチューナーを入れてテレビと合体し、パソコン上の録画をやっておられるとのことですが、DVDへのダビングはまだあまりやっていないとのこと、殆んどメンバーにとってはこれからの世界でしょう。

今日のMCCはどうやら企画倒れだったというのが正直な感想でした。

—以上—